［博士課程研究］

中高一貫キリスト教学校が生徒に与える キリスト教的影響についての質的研究[1)]

―「6年間の学校生活の間に彼らは何を学んだのか？」「なぜ洗礼を受けなかったのか？」―

箕　口　窓　香

【はじめに -リサーチの目的- 】

2011年から中高一貫のキリスト教女学校で聖書科を教えている経験の中で、中高6年間を経て生徒たちの発言がキリスト教化されていると感じることが多々あった。また、それほどキリスト教的であるなら洗礼を受けてもよいように見え、なぜ彼女たちは洗礼を受けないのかと不思議に思う場面にも度々出会った。

学校のあり方や、礼拝や授業での福音の伝え方や内容に問題や課題があるのかもしれないと試行錯誤、自問自答しながら東京神学大学で学んでいた折、2022年9月にスタートしたPrinceton Theological Seminary, Overseas Ministries Study Center, Digital Curriculum Lived Theology & World Christianityに参加する機会を得た。Lived TheologyやWorld Christianityを学ぶ中で、生徒たちが洗礼を受けない理由は、文化的な文脈と関係があるかもしれないことに気づき、プログラム修了の最終プロジェクトとして行ったのが今回の質的研究である。[2)]

【リサーチについて】

「彼らは実際に何を学んでいるのか？」そして「彼らは何を学んでいないのか？」を見定めるために、中心となる問いをあえて「6年間のキリスト教学校生活を送った生徒にとって、洗礼の一歩を踏み出せなかった最も大きな障害は何であったか？」とし､同じ学校の5人の卒業生との1対1での質的インタビュー（約60分）を、この問いに答えるのに最も良い方法として選んだ。また、質的インタビューの前に、インタビュー対象者5名を含む同じ学校の卒業生31名にインタビューで質問する問にグーグルフォームを用いたアンケートに回答してもらった。

インタビューの対象者について

卒業生5人のインタビュー対象者について、多少の背景を最初に述べておくことは、インタビュー内容の理解を深める助けとなるだろう。彼らは同じプロテスタントの、キリスト教女子中高一貫校の卒業生である。卒業年度は全員同じというわけではないが、年齢は25歳前後である。匿名性を確保するために、彼女たちの名前は仮名を用い、学校名はChristian Girls School（CGS）と呼ぶことにする。以下、学校のルールなどについては必要最低限言及するが、特定されることを避けるため関東エリアにある、比較的知名度のある学校の1つであること以上には触れないでおきたい。

インタビューの対象者たちは、質問者が牧師であり聖書科の教師でもあり、また現在大学院で学んでおり、キリスト教教育実践の改善に関心があること、OMSCのプログラムで初めてリサーチに取り組んでいることを伝えている。彼女たちがリサーチに協力的であることから、対象者たちは自動的にキリスト教に好意を持っている人たちになっている側面は否めない。また、質問者に気を遣って、以下の回答においてキリスト教についての言明はある程度好意的なされている可能性を鑑みる必要がある。

インタビュー対象者5名

ハンナ　：彼女の祖母と母はクリスチャンである。彼女の母は、自身が強いられて教会に連れて行かれたことを快く思っておらず、ハンナのことはあまり教会に連れて行かなかった。妹は小学校からキリスト教学校で、教会へ通うことが必須であり、ハンナが部活で忙しくなる頃、妹は母と教会へ行っていた。父親の家は仏教色が強い。ハンナは中学生の間は多少教会に通っていたが、お話が高齢者対象で物足りないと感じ通わなくなってしまった。彼女の目からすると彼女の母は、キリスト教を疑ったことがなく、なぜキリスト教徒になったのかもわかっていないように見える。ハンナ自身は、自分のことは自分で決めたいと考えているため、クリスチャンホームだからという理由で受洗するのに違和感があり、決断するためには十分キリスト教をわかっていなければと考える。

カレン　：家族にクリスチャンはいない。母親にはクリスチャンの友人がおり、その人の娘と一緒にセブンスデーアドベンチストの教会に通っていたことがある。しかし、教会の総会での人々の様子を見て衝撃を覚え、中学の聖書科教員に相談。他の教会を紹介されたが、近くで良いところは見つからなかった。2021年に洗礼を検討したことがあるが、近くで通える教会がなかったのでそのままになっている。近しい友人の一人にクリスチャンがいる。

ルツ　：家族にクリスチャンはいない。ルツは中3のクリスマスに受洗した。家族からの反対はなかった。中学入学が決まってから教会学校のある徒歩圏内の大きな教会に通い始め、同じ学校の先輩も通っていた。周囲から真面目な生徒と思われていたが、小さい頃はそう人に思われるのが嫌だった。彼女は学校にクリスチャンの友人もいた。

ミカ　：家族にクリスチャンはいない。両親がどのような価値を重要と考えているかもよくわからないし、自分自身も意識したことがないという。彼女は

中学生の間は教会に通っていた。結婚式は白無垢を母に着付けしてもらうために明治神宮で行いたいと考えている。結婚式の意味については特に考えたことはない。

サマー　：家族にクリスチャンはいない。彼女の両親は彼女をカトリック系の有名な幼稚園がモンテッソーリを取り入れていたところを気に入って入園させていた。彼女は6年間ほとんど毎週と言っていいほど教会に通っていたため、周りの人によくクリスチャンだと思われ、「わたしは違う」と言わなければならなかったほどである。彼女の通っていた教会学校に、同じ学校の先輩もかなり頻繁に通っていた。時間が早く9時に始まり、9時半には全て終わるため、他の約束とぶつからなかったことも通いやすかった理由であるという。

インタビューのための問い[3)]

第一に、彼らが何を「キリスト教」を学んだ内容と考えているのかを明確にするための問い1)–3)

1)　キリスト教の教えについて、好ましいと感じるのはどのような事柄ですか？

2)　キリスト教について、理解できない/よくわからないのは、どのような事柄ですか？

3)　キリスト教の教えについて、嫌だと思うのはどのような事柄ですか？

第二に、彼らの「キリスト教」との関係を見るための問い4)–5)

4)　①洗礼を受けることを検討したことがありますか？　はい/いいえ
②はい/いいえと答えた理由は何であるといえますか？

5)「教会員になる」ということについて、どのように考えますか？　気になること、知りたいことはありますか？

第三に、彼らが学校生活の間に受け止めたものについての問い6)–8)

6)　自分自身の考え方にキリスト教の影響があると思いますか？　キリスト教主義の学校に通う前との変化で何か気がついていることがありま

すか？

7） キリスト教と関連のある具体的な出来事で思い出せるものがありますか？（例えば毎朝の礼拝の中の何か、修養会での出来事など）

8） 学校での礼拝メッセージや、聖書、讃美歌によって慰められたり励まされたりしたことがありますか？もしあれば、覚えていることを書いてください。

【インタビュー結果の省察】

インタビューの間、2つの重要な関心事が念頭にあった。1つ目は、「学ばれた」内容として彼らのキリスト教化された側面を推定するためのもので、「**6年間の学校生活の間に彼らの内面的な変化/得たものは何であるか？**」というものである。

2つ目は、「**なぜ洗礼を受けなかったのか？**」という問いである。内面的にキリスト教化された卒業生たちの発言を聞きいてきた経験から、もし彼らがキリスト教国に生まれていた場合、あるいは彼らの家族や周囲の人々がクリスチャンであったならば、堅信礼や洗礼を受けていたかもしれないと思われたため、文化的な文脈上に「彼らの受洗を妨げているもの」があると考えた。そこで、文化的な障壁があるとすれば、それは何であるかを明らかにすることを目的としてあえてこのような問いを設定した。インタビューの省察は、上記の8つの問と答を順に追っていくのではなく、アンケートとインタビューの結果を精査してまとめたものを提示しつつ、これらの2つの問いの答えを見つけていくことを中心に据えて行うことにしたい。

1.「6年間の学校生活の間に彼らの内面的な変化/得たものは何であるか？」についての考察：

第一に、「キリスト教が良いものである」ことを経験として学んでいる。同時に、特定の「宗教」というものへの偏見が軽減されたり、なくなったりして

いる。裏を返せば、特定の「宗教」を持つということに偏見と抵抗があることがわかる。アンケートでも、キリスト教学校に通っていなければ、自分も大学で出会った人々のように「宗教」というものに抵抗を持っていたのかもしれないと考えた回答が多く見られた。

但し、多くの卒業生にとっては、キリスト教とは、「自分の学校の宗教」であり、「自分の宗教」、「自分と教会」という関係ではない。直接教会に結びつかない限り、生徒と教会を結んでいた学校がなくなる高校卒業後には教会（教会学校）にも行かなくなる。彼らが、自分と教会に関係があることを学ばなかったのは、学校の働きとしての福音の宣言、宣教の働きには限界があることを示唆しているかもしれない。また「中学校の間は教会学校に通っていた」という卒業生たちの証言からは、通っている間に教会が「その人と教会」という直接的な関係を育てられなかったという課題が存在している可能性も見逃せない。[4)]

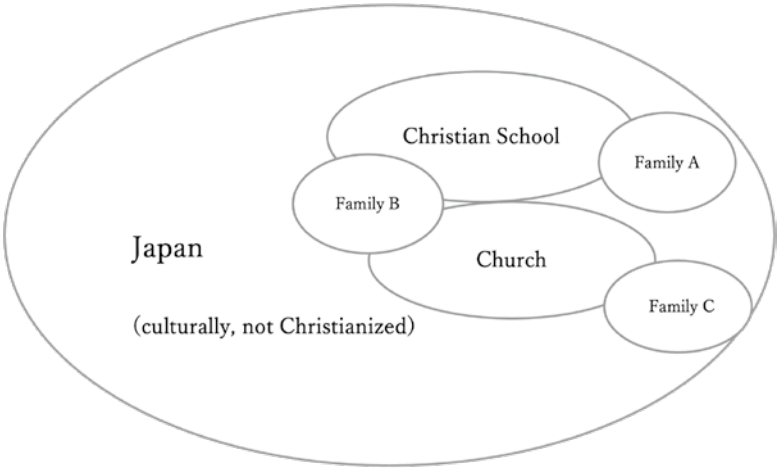

Figure 1.　日本という文化的文脈の中に学校と教会、家族がある。

Figure1.のように、「日本」というキリスト教的価値が共有されていない文

化的文脈の中に、キリスト教学校と教会があり、多くの家庭は家族Aのように、教会にはつながらず、キリスト教学校にだけ属している。クリスチャンホームからキリスト教学校に通っているのは家族B、クリスチャンホームで教会には属しているがキリスト教学校ではない家族はCに位置する。家族Bは教会の文脈にいるためクリスチャンホームの生徒は洗礼を受けやすいと考えられる。

第二に、キリスト教の教えを知識以上のものとして学んでいる。

ハンナの場合：隣人とは誰なのか、愛するとは何なのかを追求するため文化人類学へ。ハンナはインタビューの中で「隣人を愛せ」という聖句に繰り返し言及しており（アンケートで1回、インタビュー中に2回）、「隣人を愛する」とはどういうことか？「隣人とは誰なのか」「隣人を愛するとは実際どういうことなのか」を知りたいと考え文化人類学を研究フィールドに選んだ。人生の重大な事項を「隣人を愛せ」という言葉によって決めているという事実は、キリスト教の教えを知識以上のものとして学んでいることを端的に表しているといえる。

第三に、祈りが学ばれている：サマーの場合：6年間の間に「祈る」という行為が少し身近になったという。ハンナの場合：日々祈る習慣がある。「心の中で神様に祈る癖はある。困った時の神頼みともいう。神様が助けてくれるというか……と思っている。求めれば与えられる、とか。あとはなんか“思い悩むな”とか。そういうことを、困った時の神頼みやおまじないに近いと言えば近いが、でもなんか……具体的に受験で助けてくれるとかではなくて、根底で助けてくれるんだろうなって。ものすごい絶望もあるかもしれないけれど、本当に絶望じゃない。心が死ぬ絶望……？とどこかで信じている。というか、それって信仰ですかね？」[5)]と笑って話してくれた祈りは、ご利益宗教ではない祈りを祈りとすることを知っている祈りである。細かい知識は忘れてしまったと言いつつも、神がどのような方であるのかがわかっており、どのような祈りが祈りであるかを判断しつつ、聖句も身についている様子が確認できる。ハンナの場合は祖母が家で何かあると、「感謝します」という祈りを祈ってくれた

経験も話しており、家庭に祈りがある影響もあるが、入学前には自分で祈る祈りを身につけていなかったことを鑑みれば、やはり学校教育を通して学ばれたものといえる。

第四に、神が信頼しても良い方であることを学んでいる。サマーの場合：“神が選んだ”“御心に委ねる”感覚がある。卒業してから、人に「ガツガツしてないよね」「なんか委ねてるよね」と言われる時に、うっすらと以前の自分と違うことを感じるという。「キリスト教で習っていない人たちに本当にないな、と思うのは、委ねる、という感覚？自己責任論を否定されたことのない人の集いみたいなところにいるので。」「教育格差が言われて、今度それが否定されるフェーズに入っている。…中略…あなたが恵まれているから成功できたんです！とかじゃなくて。神様に選ばれてきたんですっていう御心という概念がキリスト教、、、他の宗教にもあるのかもしれないですけれど」[6)]。

ミカの場合：神が共にいる安心感がある。ミカは、入学した年の標語聖句「恐るな、私はあなたと共にいる」[7)]を今でも覚えており、卒業年もそれに類する聖句だったため、それが影響を与えていると感じている。本人の言葉では、「謎の安心感を覚えています」。「謎の」という言葉は神への直接的な信頼や信仰の表明を避けるために用いられており、聖句を掲げている学校への信頼を通して、「学校が掲げている聖句」への信頼が安心感をもたらしている様子が窺える。

カレンの場合：神に与えられた試練、与えられた使命と受け止める。カレンの父親が亡くなり、困難な時を乗り越えなければならなかった時、彼女は自分の考え方がキリスト教に基づいているものであることに自覚的になったという。父親が亡くなった後、家族の他に一番最初に話したのは、元担任のクリスチャン教諭である。困難が押し寄せてきた時、彼女は、それを不幸や不運ではなく、「乗り越える」べき「試練」だと考えている自分を発見している。さらに困難の中で、これはこの後何かこの経験に基づいてすることができる使命を与えられたのだと受け止めた。「何かやらなきゃいけないことがある」と。 聖書の言葉を自分自身に語られた言葉として聞き取り、応答しながら人生を歩も

うとする姿がある。

サマーに「委ねる」気持ちを、ミカには「謎の」安心感をもたらすほどに、そしてカレンに至っては、人生の困難に見舞われたときに、家族よりも確かなものとして感じられたのが神の存在であり、キリスト教の教えであり、頼ることができる人として選ばれたのはクリスチャンの教員でもあった。受洗を検討したことがあるというカレンは意外にも祈りや聖句についての言及は少なく、人生の真っ只中に神が共にいることを発見した、というような経験が彼女を捉えていることがわかった。全体的に教義的な理解や知識は姿を表さず、それぞれの仕方で神が信頼しても良い方であることを学んでいる。上記第三の祈りの箇所で挙げたハンナの例においても、究極的には「根底では神が支えている」という感覚や、究極的な絶望はないと考える根拠にあるのは、“救う神”への信頼であると言える。

第五に、聖句の意味を内面化している。ミカの場合：「隣人を愛しなさい」「敵を愛しなさい」などを挙げ、偽善ととれる事柄も受け入れやすくなったと答えている。同時に、それらについて、ある種の偽善だと感じる時にはキリスト教について嫌だと感じることもあるようだ。キリスト教への反感を表明しつつも、ふとした瞬間に「恐るな、わたしはあなたと共にいる」、「狭き門から入りなさい」「求めよ、そうすれば与えられる」という聖句が思い浮かび、慰められたり励まされたりしたことはあるという。

サマーの場合：弱さは強さである。CGSを卒業したのちに会ったある友人が、「わたしは弱い人間で、、、」と落ち込んでいた時、サマーは彼女の最も好きな聖句であり、モットーである「弱さは強さである」という言葉を伝えた[8)]。サマー自身がそういうことを考えた時期があり、高3の最後のクラス礼拝を担当したときに選んだ聖句であるという話をした[9)]。弱さは恐れるべきものではないというキリスト教的価値観を、自身を支えるものとして、また他者に伝えられるものとして内面化していることがわかる。

第六に、尊重されること、主体的に考えることを学んでいる。カレンの場合：他人に過干渉にならない。論理的に自分で考えられるようになった。CGS

卒業後、カレンは周囲の人間が他人に過剰に興味があると感じる。キリスト教が根底にあるCGSでは、「自分がどうしたいの？」を大事にしてくれて、「自分のやりたいことを、責任を持ってやりなさい」ということを身に付けたと思っている。それに対して、公立学校だとすごく「周りに合わせる」、「全員が足並みを揃えるのが大事。すごい伸びててもダメだし、すごい低くてもダメ、みたいな。全員がここじゃないとダメ」と常に周りを意識するため、他人に過剰な関心を持ち、人と同じにしていなければならないと考えている印象を受けるそうだ。カレンは、キリスト教学校だったから、考えることを放棄して周りを見て合わせるのではなく、「自分で論理的に考えて、自分の納得するように行動する」ことが身についたという。一人一人を尊重するキリスト教学校の姿勢は、人格を重んじるからこそ、主体性を発揮させ、他者に対して論理的に説明できる力を育てていることになる。

ルツの場合：神に尊重されているから、自分も自分と他者を尊重する。ルツは、どうしても何ができるか、できないかで自分や他者の価値を決めてしまうことに自覚的になり、そうしてはいけないことを思い出して自制している。「私は自分のことが嫌いでも、神さまが私のことをお造りになり、愛してくださっているのなら、私も自分自身のことを受け入れよう」と自己肯定感を持てるようになったと話す。

第七に、信仰を学ぶこともある。ルツの場合：中学3年生の時に洗礼を受けたルツは、「自分から神様を離れていった私たちであるにも関わらず、イエスさまが十字架の死に下ってまで、徹底的に愛し抜いてくださったこと」をキリスト教の教えについて、好ましいと感じる事柄に挙げている。いざ受洗するとなってもキリスト教について納得のいかなかったことはなかったかどうか尋ねると、「三位一体は最後まで腑に落ちないなぁと思ったが、理解はしなくていいんじゃないかなと思った」と話してくれた。

これまで見た通り、卒業生たちは概ねキリスト教的価値を自分の内面に自己肯定感や人生観を支える良いものとして取り入れているのがわかる。しかし洗

礼を受けたのがルツだけなのはなぜだろうか。もし共通する文化的文脈が障害となっているならば、障壁となっているものは何なのか、「なぜ洗礼を受けなかったのか」という問いを中心に、インタビュー結果をまとめて省察へと進んでいきたい。

2.「なぜ洗礼を受けなかったのか？」についての考察

5人のインタビューを通して気付かされたのは、教義や教理のつまずき、三位一体、復活、贖罪などについては一切触れられていないことだ。卒業生たちは、信じられない、納得がいかない、という理由ではなく、「洗礼を自分の選択肢に持たない」ことによって、洗礼を受けていないことが明らかになった。これは31名を対象としたアンケートの結果とも符合する[10)]。

インタビュー対象者のうち、キリスト教の教え自体を問題としていたのは、ハンナのみである。しかもこのハンナだけが家庭にクリスチャンの母親と祖母がいるというのは興味深い。なぜなら他の卒業生たちは、自分の家族が置かれている日本の文脈の中で考えているのに対し、ハンナだけが自分の家族が置かれている教会の文脈が本当に自分にとって納得のいくものであるのかを批判的に考えようとしているからである。ハンナにとっては、キリスト教は単に学校の宗教ではなく、家庭の宗教（母と祖母の宗教）でもあることで、他のメンバーとは置かれている文脈が異なっており、「自分とキリスト教」という関係を枠組みとして持っていると考えられる。

洗礼を検討しなかった卒業生―ミカ、サマー、ハンナ―

ミカの場合：自分の身につけた価値観がCGSの影響を受けていることはわかるけれども、それが「キリスト教のものなのかは知らない」と繰り返し、「キリスト教」とは距離を取りたい感覚が窺える。だからこそ、洗礼は「自分には関係ないこと」なのである。同時に、自分自身が置かれている文化的文脈についてどのように認識しているのかを聞き出そうとしても、両親が大事にしている価値は何だと思うか？という問いを始め、すべて「わからない」と答

えていたのも印象的であった。ハンナがあらゆるものに対して「それは何なのか？どういうことなのか？」と問いただしている姿と対照的である。

サマーの場合：6年間ほとんど毎週教会に通っていたが、洗礼を受けるのはクリスチャンホームの人であり、そうでない人が洗礼を受けたらびっくりするかもしれないが、自分も検討してみようとは考えないという。自分にとって「洗礼は敷居が……」と言い、「奇異な目で見られると思う」とも語った。ミカと同様「自分には関係ないこと」として整理されている。

洗礼を検討した卒業生―カレンとルツ―

カレンの場合：在学中CGSに通えてよかったとは思っていたけれど、キリスト教に出会えてよかったなとは思っていなかったという。“学校の宗教がキリスト教”でしかなかった。ところが父の死に直面する中で、自分が置かれていた文脈が大きく揺らぎ、家族の脆さを経験したことで、“当たり前のこと”は崩れ、「敷居」はカルトの間でさえ低くなりうることも見えたという。そこから自分を建て直す力をキリスト教が与えてくれたことに気づき、キリスト教の文脈にある自分を発見したと考えられる。しかもその状態の彼女にとって近づける存在（仲間）は、クリスチャンの先生たちであった。

ルツの場合：ルツは、教会で先輩達が洗礼を受けるのを見て（1人は学校の先輩でもあった）在学中に洗礼を検討した。先輩は、ルツにとって同じ文脈にいる「仲間」である。そして黙示録に出てくる戸口の前に立っているイエスは、自分が扉を開けるのを待っていると受け止めた時に洗礼の決断をしたという。

ここまでみてくると明らかになるのは、既に受洗しているルツと、受洗を検討したカレンには、「学校の宗教であったキリスト教」から、「自分とキリスト教」へと転換する瞬間に、橋渡しをした人物がそれぞれ存在したことである（Figure.2の矢印を参照）。さらにもう一つ、他の3人にはなかったもので、彼女たちには共通しているものがある。それは、仲の良い友人に、クリスチャンがいるということである。他の3人にはいなかった。

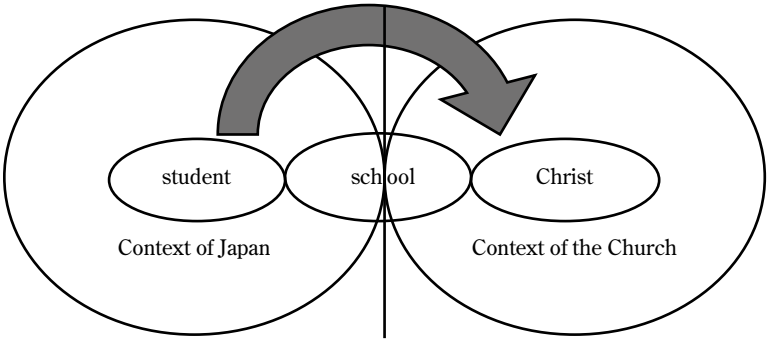

Figure2.「橋」は図の矢印のように、教会の文脈に入っていくために必要とされている。
生徒たちに見えているのは、左半分の世界だけであり、日本にあるキリスト教の学校に通っている事実だけである。彼らにとって教会やキリストは、学校に関係するものであり、自分自身に関係するものではない。洗礼の決断は、彼らにとっては、「神」がいないとする日本の文脈から、イエスは神の子であるという教会の文脈に移動していくということであり、学校に入ったのも神の導きであったことが見えてくることである。

Figure2.のように、生徒にとってみると、物理的には学校を通して教会と、またキリストと繋がっている現実がある。福音は、いつでも学校を通さずに個人的に受け取ることができるものでもある。しかし、日本の文脈に生きている生徒にとっては、教会の文脈に飛び込むこと、またキリストに出会うという出来事は、自分の文化から出るという大きな決断（高い敷居をまたぐ勇気）を必要とする。このため、先に教会の文脈に飛び込んでいる仲間がいる場合には、その敷居は低く感じられるし、自分のいる文脈が不確かなものであると認識すると、自分の文化から出ることについての抵抗は少なく、敷居は低く感じられる。以上のように、インタビューから見えてきた事柄をもとに文化的に起こっていることを整理してみたつもりだが、この先ではそれらのことを神学的に検

証してみたい。

神学的検証

神学的には、洗礼とは回心であり、新生であり、神への主体的な応答であり、キリストの体の部分とされることである。けれども、日本の生徒や卒業生にとっては、洗礼はマイナーで奇妙な団体への入会儀礼であると見えている現実がある。このことを踏まえて、キリスト教の学びと洗礼までを5段階のステップに整理してみた。

洗礼までの5段階

0. 福音や聖書についての知識がない。／「宗教」に近づくな、変なものである。
1. 福音についての知識があり、聖書の物語について理解がある。／キリスト教に親しみがある。
2. 聖書の倫理的な教え、知恵について理解している。
3. 自身の文化的文脈が相対的なものであることに自覚的である。
4. 福音を（福音によって救われる）経験を通して理解している。
5. イエスが「自分にとって」メシアであるという気づきー信仰告白、洗礼を希望する。

4. の経験を計画して作り出すことは人間にはできないが、礼拝や授業はこのために用いられる可能性がある。また、学校教育に携わるキリスト者はキリストの体としての教会の働きとして、Figure3.に加えられた矢印のように、日本の文脈に赴くのである。そこで生徒が現実の困難を乗り越える経験が福音の光のもとでなされる時、福音が現実化して人生のナラティブが日本から聖書に移り変わるともいえる。このジャンプは大きなもので、橋を必要としている。

この働きの橋としての役割が強く意識されるとき、そのキリスト者自身もかつては橋を渡っていった者であることが共有され、福音を聞く者に信頼されて

いる関係があることが必須である。伝道する者が生徒たちの「仲間」になり、信頼できる「人」として教育と伝道の業に携わるならば、生徒たちにも教会の文脈へと渡っていく橋が見えてくるはずである。つまり、Figure2の矢印にならなければならない。

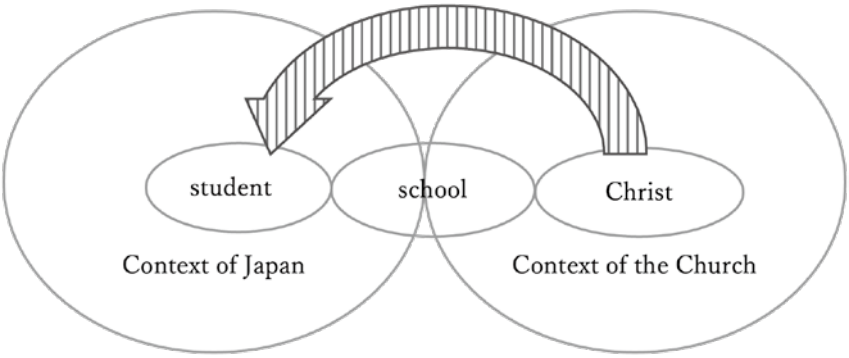

Figure3. 教会から派遣されているクリスチャンの教師たちは、図の矢印のように、生徒たちにとっては、外部の人として見える。教師は自分をFigure.2のように日本の文脈からの橋とする必要がある。橋となった良い例 は、カレンが大変な時に助けたクリスチャンの教師たちである

しかし、橋があったからといって必ず渡るわけでもない。どんなに敷居が低くなろうとも、洗礼を受けたいと思うかどうかは別の話でもある。文化的な障壁さえ取り除けばもっと洗礼を受ける人が増えるのかもしれないと思い、この調査を始めたが、逆に、本当に人生の主人を変える時に人は洗礼を受けるということがルツとカレンの姿から明らかになった。わたしたちを神から遠ざけるものの正体は、やはりわたしたちの内にある「罪」なのである。

なぜならルツもカレンも、自分達が他者と違ってしまうことを恐れず、日本の文脈と合わなくなることを承知で洗礼を検討しているのである。彼女たちの性格や特性の影響もあるかもしれないが、洗礼を検討した二人が同調圧力や常識が受洗を思いとどまらせたという感想を一切口にしていないということは、

文化的障壁は実際乗り越えようと思った人にとってはもはや障壁でないことを表している。つまり、文化の橋を渡り受洗するということは、「日本の常識」を神（絶対）としている生き方から、キリストを主と仰ぐ人生に変わるという回心の出来事そのものであるともいえる。罪の結果が死であると記されている聖書と、文化的罪（同調圧力や人と比べること）によって苦しんでいる生徒の現実を合わせみると、キリスト教学校だからこそ生徒に伝えられることが今の日本で十分に必要とされていると考える。

これからの聖書教授についての提案

そのように考えるならば、わたしたちには何をすることが求められているのだろうか。そのヒントとなる聖書箇所は、使徒言行録の8章26-40節である。フィリポは主の天使に言われた通りの道を通り、エチオピア人の宦官に出会い、イザヤ書を朗読していた宦官に、「読んでいることがお分かりになりますか」と声をかける。宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と答え、フィリポは馬車に乗ってそばに座り、口を開いて聖書のその箇所から「説き起こして、イエスについて福音を告げ知らせた」とある。彼らは一緒に道を進んでいき、水のあるところに来た時、宦官は言った。「ここに水があります。バプテスマを受けるのに、何か妨げがあるでしょうか」と。

伝道に赴く者たちは、異文化世界に生きている者に声をかけ、対話しその人の馬車に乗って一緒に道を進む「仲間」となり、その人のために聖書箇所から説き起こしてイエスについて福音を告げ知らせているかどうかが問われているのではないだろうか。フィリポと宦官のやりとりが何日を要したのかは記されていないが、宦官に必要なだけ一緒に進んでいったことは確かである。

学校の働きにおいては、今生徒たちが日本という荒野の道を走っているその「馬車」（それぞれの置かれた状況や課題）に乗って「一緒に道を進み」、聖書が何を示そうとしているのかを人格的な出会いを通して相手の必要に合わせて「説き起こして、イエスについて福音を告げ知らせ」、「手引き」することが求

められている。そうすれば、バプテスマを受けるのに、何も妨げはなくなるのではないだろうか。

特に生徒たちはこの宦官同様、生来的に礼拝共同体に属していない存在であり、ただ聖書を読んでも、「自分に関係のあることとして」その意味がわかるわけではない。生徒が必要なその「時」に遣わされた場所で、イエスについての福音を知らせる必要があるといえる。

カリキュラムの提案[11)]—知識、感情、意志を包括しつつ、対象の年齢・知性に合わせる—

1）生徒たちが実は「無宗教」など「常識」を絶対的なものとして既に信じていることに自覚的になるのを助ける。自分達の「常識」がニュートラルなものでも、絶対的なものでもないという視点を持つことは、文化的な敷居を取り払うと同時に、他文化への理解を広げることにもつながる[12)]。（生徒の馬車に乗る－文化的環境）

例）身近な初詣などの習慣について考察する。アンケートを用いて自分の判断基準の根拠は何かを吟味する機会を作る。高校生、大学生であれば魯恩碩,（2021）, *“ICU式「神学的」人生講義 この理不尽な世界で「なぜ」と問う”*, CCCメディアハウス, の第一講で扱っている準拠枠の取り組みなど（pp. 10~18）。

2）日本人として生きているうちに無自覚に信頼し、拝んでいるもの－時に苦しみの原因になっているもの－に気づく[13)]：卒業生が挙げたキーワード（大多数、考えない、主張しない、同調圧力などは人間に普遍的な特徴でもある）と関連づけて聖書と現代社会、自分自身について聖書を通して考える機会を得、日本の文化的罪の特徴（文化的「偶像」）を重ね、神から離れて生きる「罪」である気づきを得る。

例）ルカによる福音書23章21 ～ 25節の「人々」、マタイ8章28~34節の「町中の人」の姿、心理に焦点を当てる。創世記3章とニーメラーのゲッティンゲンでの説教に聞き、「どこにいるのか」と言う声を自分達に語られて

いる声として一緒に聞く。「何もしなかった罪」。神に応答しないことの自覚。社会の担い手になる身として生き方を比較しつつ、問いかけている神の愛を学ぶ。

3）イエスとの出会い：生徒たちが自分の年齢に応じた日常的な悩みや問題を解決するのを助ける（生徒の馬車に乗る－年齢・課題）

例）アイデンティティの形成時期であることから、自我の問題や、自己肯定感、自己の受容についてキリストに出会った人物の変容に触れられる聖書箇所を取り上げる。ザアカイや、罪深い女など[14]。

4）神の言葉を聞く：自らに語りかけてくる神の言葉として読む（聖書との出会い）[15]

例）マルタとマリア、放蕩息子の喩え、99匹の羊など、多くの生徒が躓く喩えを、マリアや弟の立場、見つけられる側の羊の立場で聖書を読むことができたなら、彼らがすでに神の愛の中―教会の文脈の中―にいることがわかる。

主の天使はフィリポに、「ここを立って南に向かい、エルサレムからガザへ降る道に行けといった。そこは寂しい道である」。学校で聖書を教えるのも、伝道するのも、そこは寂しい道である。けれども、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」という主の言葉に従って遣わされていく。生徒たちが、「洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか」と言うまで。

おわりに

日本キリスト教教育学会の発表後、「洗礼は受けないといけないのでしょうか」と3名の参加者に声をかけられた。どの文脈で質問されているかによって答え方と言葉は変わってくる。ただ、近藤勝彦が2022年に『キリスト教教義学下』の中で指摘している、「われわれはむしろ、日本において教会が現にさらされている、洗礼は受けても受けなくてもさして違いはないかのように見なさ

れている傾向の中に置かれている」という現実を垣間見たのではないかということが気になっている[16)]。そして、近藤の記している通り、洗礼を施す機会が稀な神学教師や教務教師がその職務を遂行しているのは、「洗礼を受けた恵みの事実に基づいてであり、他の人々の洗礼を目指してである。その使命の遂行によって、何ら洗礼を軽視しているわけではない」ということの重要性を改めて確認したい[17)]。

今回の研究をきっかけとして、日本の洗礼理解の変遷、また洗礼の社会的、個人的、神学的、経済的、心理的、霊的な側面について今後継続して研究していきたい。そうして日本の文脈を確認しつつ、発達理論に基づき、日本の学校、教会のための生徒たちの発達段階に合ったより具体的なカリキュラムを模索していきたい。

（みぐち・まどか）

注

1） この小論は2023年6月10日,日本キリスト教教育学会第35回学会大会で発表したものに加筆修正を加えた。

2） Easten Law教授の指導の下行われた今回のプロジェクトでは、質的研究を用いて神学的に自らのフィールドの理解を深めることを目的としているため、研究方法などの未熟な点はお許し願いたい。研究法は当時のカリキュラムに存在していなかったため、質的研究と神学的考察についてはイギリスのローハプトン大学で行われた2023年4月20日、21日に行われたTARN Training（Theological Action Research にzoomでのセッション参加）、以下の文献から特に大きな助けを得た。クヴァール,スタイナー,能智正博・徳田治子訳,（2021）,*質的研究のための「インター・ビュー」*,新曜社.

Cameron, H. Bhatti, D., Duce, C., Sweeney, J., Watkins, Clare. (2013) *Talking about God in Practice*. [edition unavailable]. Hymns Ancient & Modern Ltd. Available at: https://www.perlego.com/book/1694365/talking-about-god-in-practice-theological-action-research-and-practical-theology-pdf (Accessed: 18 April 2023).

Cameron, H., Duce, C. (2014) *Researching Practice in Mission and Ministry*. [edition

unavailable]. Hymns Ancient & Modern. Available at: https://www.perlego.com/book/1437183/researching-practice-in-mission-and-ministry-a-companion-pdf (Accessed: 18 April 2023).

3） 30人のうち2名が洗礼を検討したことがあるが受けていないと答えている。 2名とも人生の困難に直面した時に検討しており、1名はクリスチャンホームであった（アンケート回答者の中に受洗者がいなかったため、同校の卒業生のクリスチャン1名にアンケートとインタビューに加わってもらい、31名中1名は「洗礼を検討し受洗した」結果となった）。検討しなかった理由についての記載からは、「無宗教」という立場が前提としてあること、また特定の「宗教」にコミットすることへの抵抗がみてとれる。

4） ウェスターホフは、信仰を4つの型にわけ、1.経験的信仰、2.帰属的信仰、3.探究的信仰、4.告白的信仰の順番に信仰が展開していくと説明している（ウェスター―ホフ，J.H.（1998）, “*子どもの信仰と教会－教会教育の新しい可能性*”, 新教出版社, pp147-161）。キリスト教学校の生徒たちは経験的、探究的信仰の萌芽を窺わせることがあるが、彼らの帰属意識が学校ではなく、教会になるかどうかの隔たりがある。

5） インタビューの言葉をそのまま引用した。……は彼女の沈黙した時間を表す。

6） 同窓生の全員が入学前は同様に自己責任論だったが、CGSの卒業時には変化していた人が多いとサマーは話している。尚、CGSの入学式では、入学してきたのは“神様に選ばれてきた”のであって、あなたの努力や偶然ではないという文脈でヨハネによる福音書15章16節「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなた方を選んだ」、という聖句が毎年語られている。

7） イザヤ書43章5節

8） おそらく「わたしは弱い時にこそ強いからです」（Ⅱコリント12:10）をさしている。

9） CGSでは中高別の礼拝、学年別の礼拝、クラス別の礼拝があり、クラス別での礼拝のお話は生徒が担当する。

10）アンケート結果で洗礼を検討しなかった回答は、その理由に「考えたことがなかった」、「必要がなかった」をはじめ、「無宗教だから」など洗礼が選択肢になかったことを示唆するものが多かった。また、「学んだ内容で十分」や、「特定の宗教に入ることに抵抗がある」。さらに「教会員が身近にいなかった」という回答も3人ずつと多い。

11）信仰は認識、感情的応答、またキリストに従う決意のどれが欠けてもならない

が、どれかだけに還元されてはならず、むしろその人の人格を構成する全てのものが合成される行為であると言うKrychの指摘は、カリキュラムを組む上で重要である（Krych, 1987, p14）。

12）例えば、阿満利麿,（2007）,“*日本人はなぜ無宗教なのか*”, 筑摩書房に考察されているように、日本人は「無宗教」という信仰を持っているという前提に立つと教え方も変わる。無意識に「拝んでいる」ものが何であるかを見つめることは、文化的な偶像の正体と自らの内の罪に自覚的になるきっかけを与える。一方で、「無宗教」については藤原聖子編,（2023）,“*日本人無宗教説*”, 筑摩書房で「無宗教」という言葉の語用研究から「無宗教」と言う言葉を無批判に使用することが戒められているが、卒業生アンケートの感覚の中には「私は無宗教だ」が「私は普通の人間だ」（藤原, p250）と言うニュアンスで用いられている。いずれにせよ、その正体が何であれ生徒の乗っている馬車（文脈や課題）に一緒に乗り込むことが重要である。また、特定の宗教を信じると視野が狭くなるという考え方が存在するが、Mikoski, S. G.（2009）,“***Baptism and Christian Identity: Teaching in the Triune Name***”, Eerdmans Pub Co, MI.には、多元的民主主義においては、アイデンティティと寛容（identity and openness）を両方持って現代の複雑な要求に応えなければならないことが度々言及され、この両方を三位一体の神への信仰と洗礼は教えるものだとしている（p202, 213, 216, 232, 236他）。現代の課題に応える態度として学ばれる必要と価値のあることである。

13）ミコウスキーによれば、ニュッサのグレゴリウスが洗礼を授けていたのはほとんど大人、異教徒、ユダヤ教徒、ニケア派でない人たちであり、教える側の人々には宗教背景によって異なる側面を強調するよう指示していた（Mikoski, p88）。

14）Krych, A. M. (1985) “***Communicating ‘justification’ to Elementary-Age Children: A Study in Tillich’s Correlational Method and Transformational Narrative for Christian Education***” (Ph.D. dissdertation, Princeton Theological Seminary), pp405-416　とその著作Krych, A.M. (1987), ***Teaching the Gospel Today***”, Augsburg Publishing House, pp145-151　において、自己の受容、他者の受容、イエスによる受容と赦しによるそれまでの自己の否定から新たなる受容への変容など、登場人物に起こった出来事を生徒たちの日常に翻訳された形で読み解く授業のアプローチに採用する聖書箇所の例として挙げられている。

15）ウィルカーソンは、生徒に関心のある結婚についての議論を導入したホセア書の授業を展開し、神と人間との応答と人間のあり方への考察をもたらす授業案を提案している。Wilkerson, L. (Dec 2022), “Curriculum Reform for Christian

Education (Part1) :
A Research-Based Inquiry Design Method (IDMCE)", *Christian Education Journal Research on Educational Ministry*, Vol.19 No.3, pp.460-477、Wilkerson, L. (April 2023), "Curriculum Reform for Christian Education (Part2) : Designing and Implementing an Inquiry Design Method (IDMCE)", *Christian Education Journal Research on Educational Ministry*, Vol.20 No.1, pp.12-32

16）近藤勝彦, 2022, "キリスト教教義学下", 教文館, p.298

17）近藤, p.294、続いて挙げられているわれわれの課題として「福音主義教会における聖礼典理解の弱さを克服し、とりわけ洗礼の意味理解を深めて、洗礼固有の意味を確かにすること」が「今日のキリスト教教会全体が直面している伝道の困難に耐え、伝道を進めていく一つの大きな支え」になるであろうと語っている。近藤, p302